去年の人

松下英麿

回想の作家たち

去年の人

回想の作家たち

松下英麿

中央公論社

去年（こぞ）の人——回想の作家たち
昭和五十二年八月二十日初版印刷
昭和五十二年八月三十日初版発行
著者　松下英麿
発行者　高梨茂
印刷所　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二—一
電話（五六一）五九二一
振替口座二—三四
©一九七七　検印廃止

去年の人　目次

坪内逍遙 9
小川芋銭 18
岡本かの子 28
泉鏡花 38
富岡冬野 47
島崎藤村 52
徳田秋声 61
西田幾多郎 70
三木清 78
木下杢太郎 86
幸田露伴 96

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

横光利一 122
菊池寛 131
林芙美子 140
斎藤茂吉 149
折口信夫 171
岸田国士 181
高村光太郎 190
会津八一 206
小林古径 259
横山大観 263
大鹿卓 269

高浜虚子 278
永井荷風 288
阿部次郎 297
吉井勇 306
室生犀星 316
山田正平 325
吉川英治 330
久保田万太郎 338
尾崎士郎 349
小杉放庵 359
佐藤春夫 368

吉野秀雄 380
坂本繁二郎 390
内田百閒 399
日夏耿之介 410
志賀直哉 421
川端康成 430
文人嗜酒 444
あとがき

花　あかず

眺めてあれば
去年(こぞ)の人の
眼(ま)なかひに　たつ
まぼろしか　否(いな)

去年の人——回想の作家たち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

坪内逍遙

I

この国の近代文学の夜明けの空には、泰西の余光を浴びつつ、大小の星がそれぞれの光芒を放っているが、わけても、紅・露・逍・鷗とよばれる四人は輝かしい座を占めている。この尾崎紅葉、幸田露伴、坪内逍遙、森鷗外という四文豪のそれぞれに対する評価が、この半世紀余のあいだに変貌しつつあるのは止むをえないが、そのパイオニアとしての光輝は失せるものではなく、かえって、各人ちがった道を開拓したことが、この国の文学的展望をより広濶ならしめたといえる。紅葉と露伴は慶応三年の生れであり、逍遙はそれより八年前の安政六年、鷗外は逍遙より三歳下の文久二年生れであった。したがって、この四人のうちでは、逍遙がいちばんの年長者であり、また、この国の文学近代化への暁鐘を最初にうち鳴らした功労者でもある。

逍遙が、死の直前に生涯をかけた『新修シェークスピヤ全集』の最後の朱筆（昭和一〇年）をおいたとき、彼は、

これのみはおほしたて得つほかの花はただ苗のみを植ゑすてしわれ

と感懐の一首を洩らしたが、その「苗」は、小説、戯曲、評論、演劇、舞踊、教育という多方面にわたっていた。私はさいわいにも、この四人のうちの、露・逍の二家には、親しく謦咳に接することができたことを生涯の思い出としている。しかしそれは、たんに秀れた文学者に会ったという意味もあるにせよ、その人間としての深い生き方にじかに触れたということが、より大きな比重を占めている。

露伴については、すでに幾度か拙い追懐記をかいた。逍遙は、私にとっては恩師のそのまた恩師にあたる。さらに、また、その最後の講筵につらなった最年少者でもあった。その黄口児が、いま、かつて仰ぎみた大先生の行状の一端について、とやかく記すのは、厳につつしまねばならないのであるが、近代という鏡は、とかく可視的限界において、すべて受像する皮肉な性質を一面では要求されている。かつて、正宗白鳥は、自ら逍遙の孫弟子といっていたが、逍遙の文学的行迹に限っては、辛辣な批評をはばからなかった。白鳥は、逍遙の高弟である島村抱月が直接の先生であったから、あえて孫弟子といったのであるが、そういう意味からいえば、今日、十数万人の孫弟子、曽孫弟子たちがこの国にひしめき合っているわけで、その壮大な山系の頂点を占める人が逍遙ということになる。

こういう系譜は、他の三家には見られないところで、紅葉門に鏡花、秋声そのほかの門人があって、その硯友社系統の幾人かはいるにしても、その量においては同日の論ではない。このこと

から考えてみても、逍遙は偉大な教育者であったといえるし、じじつ彼の薫陶は、かゆいところに手のとどくような懇切なものであった。

この、彼の天性ともいうべき教育的触手は、彼が創設した早稲田大学文学部のほかに、この国の文学近代化のスタートラインの標札とされる評論、『小説神髄』（明治一八年刊）にすでにはっきりしめされ、さらに、「早稲田文学」の創刊（明治二四年）、新劇運動の中核となった文芸協会の設立など、すべて広い意味の教育的理想に出発しないものはない。私どもの師である会津八一は、容易に人に許さない傲岸不屈の人であったが、師にあたる逍遙に対してのみは、生涯を通じて畏敬をもって接し、その没後は、「どうしても、『坪内逍遙』というものを書いておかねばならん」といい通したが、とうとうこの本はできずじまいに終った。八一が、自家の歌集の次になすべき著書として大きな負担を感じていたことは、八一の性格としてはそうせざるをえない師への黙契があったからである。

まだ世上に知られていない話の一つにこういうのがある。八一は、大正七、八年のころであるが、逍遙がかつて校長を兼任した早稲田中学の教頭の職にあって大学の講師を兼任していたものの、深く考えるところがあって、一切の教職をやめようと決心し、まず、逍遙にそのことを計った。心配した逍遙は、八一を自宅によんで、「君の決心はなかなか固いようだが、どうだねこの際外国へ行ってみないかね。三年ぐらい遊学して帰れば、新しい道も開けよう。ただこの際、他の人との振合いもあって、学校から費用を出すわけにはゆかないから、僕個人がその費用を何とかつくろう。どうだね」ともちかけた。これは八一にとっては、飛びつきたいほど有難い話であ

って、明治四十三年に、早稲田中学の英語科教員になったのも逍遙の尽力であった。しかもまた、今度、自分の費用で欧州に留学させようというのである。八一は感激したが、しかし「学校がやるというのなら考えましょうが、先生の私費でご迷惑をかけるのは、洵に心苦しいからお断りします」といった。八一は私に「坪内という人はそういう親切な人さ」と、しんみり語った。

八一は、逍遙の在世中は、内の人として遇され、熱海に坪内邸(双柿舎)ができて、浴室をつくるときも、自分の都合はさておいて、「会津の大きな体に合せて作るように」という注文をセン夫人にされたという。逍遙の行きとどいた性格は、ここにもよくあらわれている。

Ⅱ

逍遙の早稲田大学引退の最後の講義は、昭和四年であったろうか。できたばかりの美しい大講堂の壇上には、制服の黒いガウンをまとった教授たちが目白おしに並び、満堂立錐の余地もないまでに学生が埋めつくしたなかで、七十一歳の老博士は、お手のものの『キング・リア』を講義した。ラッキョウ型の頭を前後左右に振り、ときに白髯をしごいて、役者の台詞そのままに音声朗々と進めていくさまは、まさに名人の至芸というにふさわしいものであった。

彼にとって、早稲田大学は自分の家のようなものであったが、ふたたびこの教壇に立つ機会もあるまいという悲しみの感慨もあったろう、小一時間の講義のあと、ハンカチで顔をぬぐって、瞬間呆然としたように一処に目をとめていた。すでに四十余年前のことながら、今もその日の光景が私の眼裡にまざまざと泛んでくる。会津八一が、かつて、

むかしひとこゑもほがらにたくうちてとかししおもわみえきたるかも

と歌ったのは、そのままに、この日のことのようにも受けとれる。

シェークスピヤ劇と逍遙とは、ほとんど一体不離ともいうべき宿縁で、その最初の訳刊は『自由太刀餘波鋭鋒』（明治一七年）であって、これはいうまでもなく『ジュリアス・シーザー』の全訳である。さらに、近代文学評論史上で有名な、森鷗外との論争である「没理想論」も、その発端は、「早稲田文学」に掲載した『マクベス』評注であった。逍遙は、シェークスピヤの全訳に着手してから、幾度も改訳を重ね、早稲田を去ってからも熱海の別邸双柿舎にこもって、悠々風月に嘯くどころか、この訳業の決定版のために心血をそそいだ。この決定版の刊行を引受けたのが、中央公論社の嶋中雄作で、『新修シェークスピヤ全集』と銘うって菊半截本四十巻として、昭和八年九月に第一回を公刊した。逍遙はその校正刷を三校まで目を通し、校正子があわてるほどの綿密な朱筆を施し、その余の時間で、次々と改訳訂正などを試みたのであった。

この刊行は、宣伝も大がかりで、全国にわたって記念講演会などを開いたこともあってか、当時としては驚くべき十三万余の予約があり、大成功というべきであった。逍遙もその反響の大きいのを喜んで、一日関係者を熱海の露木に招いて労をねぎらった。その記念というわけでもなかったが、丸ビル五階の社屋の奥にタイムレコーダーが突如として設けられた。これは、社長が何がしの稿料を持参したところ、それは無用だから社の何かの備品代にせよといわれ、思案の末にタイムレコーダーにしたということであった。嶋中が社長になったときに、逍遙は、その人生訓

のために額字を書いて与えた。それは「勢到七八分即止、如張弓能至満則折」(勢の七、八分に到らば即ち止む、もし弓を張ってよく満に至らば則ち折る)という古人の句であった。この文言の中に、如何に逍遙が教育者であり、中庸をその処世の箴としたかがうかがわれるように思う。

昭和九年の五月ごろであったか、私は先輩に伴われて双柿舎にいった。老翁は、声は元気であったが、非常に疲労して休んでいた。「いや、ご苦労をかけます。もう一息のところで……」と、進行の打合せをおわったところで、「こういう腰折れができたので」と、金砂子の斐紙の短冊にかいた一首をしめされた。その歌は、

ゆくりかに又一歳をながらへぬわれこのとしをやはあだにせむ

という感慨のこめられたものであった。逍遙は、大正八年五月、還暦を迎えたのを機会に、和歌を作りはじめて、弟子の会津八一の批評を求めたのであった。このことは、八一の『南京新唱』に寄せたその序文に明らかである。歌風は、八一のように、美の高潮を歌いあげたものよりも、むしろ日常生活の感興歌が多いので、かえって人間が表現されている。

昭和十年の正月には、『新修シェークスピヤ全集』の最後の原稿ができたが、博士は、うちつづく過労と安心のためか、床につく日が多く、ついに二月二十八日に急性肺炎で幽明境を異にした。七十七歳であった。しかし、五十年の歳月をとりくんだこの全集の、翻訳というよりも創作

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.